

じゅう に いんねん
十二因縁図

問ふ、^{るてん}流転の十二^{なんら}因縁とは何等ぞや。答ふ、一には^{むみょう}無明、^{くしゃ}俱舎に云はく「^{しゆくわく}宿惑の位は無明なり」文。無明とは昔^{いか}愛欲の煩惱起こりしを云ふなり。男は父に^{いか}瞋りを成して母に愛を起こす。女は母に^{いか}瞋りを成して父に愛を起こすなり。俱舎の第九に見えたり。二には^{ぎょう}行、俱舎に云はく「^{むかし}宿の諸業を行と名づく」文。昔の造業を行とは云ふなり。業に二有り。一には^{けんいん}牽引の業なり。我等が^{まさ}正しく生を受くべき業を云ふなり。二には^{いん}円満の業なり。余の一切の造業なり。^{いわゆる}所謂足を折り手を切る先業を云ふなり。是は^{いん}円満の業なり。三には^{しき}識、俱舎に云はく「^{うん}識とは正しく生を結する^{うん}蘊なり」文。正しく母の腹の中に入る時の^{ごうん}五蘊なり。五蘊とは^{しきじゆそうぎょうしき}色受想行識なり。亦^{おん}五陰とも云ふなり。四には^{みょうしき}名色、俱舎に云はく「^{しよ}六^{まえ}処の前は名色なり」文。五には^{ろくしよ}六^{げん}処、俱舎に云はく「^{こん}眼等の根を生ずるより三^わ和の前は六^{じゆ}処なり」文。六^{じゆ}処とは眼耳鼻舌身意の六根出来するを云ふなり。六には^{そく}触、俱舎に云はく「^{しゆ}三^{しゆ}受の因の異なるに於て未だ了知せざるを^{しゆ}触と名づく」文。火は熱しとも知らず、水は寒しとも知らず、刀は人を切る物とも知らざる時なり。七には^{しゆ}受、俱舎に云はく「^{いんない}姪愛の前に在るは^あ受なり」文。寒熱を知って、未だ^あ姪欲を^あ発こさざる時なり。八には^{あい}愛、俱舎に云はく「^{しゆく}資具と^{むさぼ}姪とを^{むさぼ}貪るは^{あい}愛なり」文。女人を愛して^あ姪欲等を^あ発こすを云ふなり。九には^{しゆ}取、俱舎に云はく「^{あまね}諸の境界を得んが^{ちゆく}為に、^{あまね}遍く^{ちゆく}馳求するを取と名づく」文。今世に有る時、世間を嘗みて他人の物を^あ貪り取る時を云ふなり。十には^う有、俱舎に云はく「^い有は^よ謂はく^よ正しく^{とうう}能く^ひ当有の果を^ひ牽く業を造る」文。未来に又此くの如く生を受くべき業を造るを有とは云ふなり。十一には^{しゆく}生、俱舎に云はく「^{しゆく}当の^{しゆく}有を結するを生と名づく」文。未来に^{まさ}正しく生を受けて母の腹に入る時を云ふなり。十二には^{ろうし}老死、俱舎に云はく「^{しゆく}当の^{しゆく}受に至るまでは^{しゆく}老死なり」文。生^{しゆく}老死を受くるを^{うひくのう}老死^{うひくのう}憂悲苦惱とは云ふなり。

問ふ、十二^{さんぜりょうじゆう}因縁を三世^{むみょう}兩^{ぎょう}重に分別する方如何。答ふ、^{むみょう}無明と^{ぎょう}行とは過去の二因なり。^{しき}識と^{みょうしき}名色と^{ろくにゆう}六^{そく}入と^{しゆく}触と^{あい}受とは現在の五果なり。^{あい}愛と^{しゆく}取と^う有とは現在の三因なり。^{しゆく}生と^{ろうし}老死とは未来の兩果なり。過去に二つ、現在に八つ、未来に二つなり。私の^{りやくじゆ}略^{りやくじゆ}頌に云はく「過去の二因^{無明}・^行 現在の五果^識・^{名色}・^六 現在の三因^愛・^取 未来の兩果^生・^{老死}」と。問ふ、十二^{しゆく}因縁^{しゆく}流転の次第如何。答ふ、無明は行に縁たり。行は識に縁たり。識は名色に

縁たり。名色は六入に縁たり。六入は触に縁たり。触は受到縁たり。受は愛に縁たり。愛は取に縁たり。取は有に縁たり。有は生に縁たり。生は老死憂悲苦惱に縁たり。是其の生死海に流転する方なり。此くの如くして凡夫とは成るなり。問ふ、還滅の十二因縁の様如何。答ふ、無明滅すれば則ち行滅す。行滅すれば則ち識滅す。識滅すれば則ち名色滅す。名色滅すれば則ち六入滅す。六入滅すれば則ち触滅す。触滅すれば則ち受滅す。受滅すれば則ち愛滅す。愛滅すれば則ち取滅す。取滅すれば則ち有滅す。有滅すれば則ち生滅す。生滅すれば則ち老死憂悲苦惱滅す。是其の還滅の様なり。仏は還つて煩惱を失つて行く方なり。私に云はく、中天の人には十二因縁具に之無し。又天上にも具には之無く、又無色界にも具には之無し。

一念三千理事

十如是とは、如是相は身なり玄二に云はく「相は以て外に擲る、覽て別つべし」文。籤六に云はく「相は唯色に在り」文。 如是性は心なり玄二に云はく「性は以て内に擲る、自分改めず」文。

籤六に云はく「性は唯心に在り」文。 如是体は身と心となり玄二に云はく「主質を名づけて体と為す」文。 如是力は身と心となり止に云はく「力とは堪任を用と為す」文。

如是作は身と心となり止に云はく「建立を作と名づく」文。 如是因は心なり止に云はく「因とは果を招くを因と為す。亦名づけて業と為す」文。 如是縁止に云はく

「縁とは縁を業を助くるに由る」文。 如是果止に云はく「果とは剋獲を果と為す」文。 如是報止に云はく「報とは因に酬ゆるを報と曰う」文。 如是本末究竟等玄二に云はく「初めの相を本と為し、後の報を末と為す」文。

三種世間とは、五陰世間止に云はく「十種陰界異なるを以ての故に、五陰世間と名づくるなり」文。 衆生世間止に云はく「十界の衆生寧ろ異ならざることを得んや、故に衆生世間と名づくなり」文。

国土世間止に云はく「十種の所居通じて国土世間と稱す」文。 五陰とは、新訳には五蘊と云ふなり。陰とは聚集の義なり。一には色陰、五色是なり。二に受陰、領納是なり。三に想陰、俱舎に云はく「想は像を取るを体と為す」文。四に行陰、造作是行なり。五に識陰、了別是識なり。止の五に婆沙を引いて云はく「識先づ了別し、次に受は領納し、想は相貌を取り、行は違従を起こし、色は行に由つて感ず」と。

百界千如三千世間の事

十界互具即百界と成る。地獄衆生世間十如是 五陰世間十如是 国土世間十如是地 下赤鉄 餓鬼衆生世間十如是 五陰世間十如是 国土世間十如是 畜生衆生世間十如是 五陰世間十如是 国土世間十如是水陸空 修羅衆生世間十如是 五陰世間十如是 国土世間十如是人 海鮮底 衆生世間十如是 五陰世間十如是須 弥四州 天衆生世間十如是 五陰世間十如是 国土世間十如是人 宮殿 声聞衆生世間十如是 五陰世間十如是 国土世間十如是 縁覚衆生世間十如是 五陰世間十如是 国土世間十如是人 同居 方便美報 菩薩衆生世間十如是 五陰世間十如是 国土世間十如是人 同居 方便美報

仏衆生世間十如是 五陰世間十如是 国土世間十如是人 寂光土 止觀の五に云はく「心と縁と合すれば則ち三種の世間あり、三千の相性皆心より起こる」文。弘の五に云はく「故に止觀に正しく觀法を明かすに至つて、並びに三千を以て指南と為す。乃ち是終窮究竟の極説なり。故に序の中に説己心中所行法門と云ふ。良に以有るなり。請ふ尋ね読まん者心に異縁無か

れ」文。又云はく「妙境の一念三千を明かさずんば、如何ぞ一に一切を撰することを識るべけん。三千は一念の無明を出でず。是の故に唯苦因苦果のみ有り」文。又云はく「一切の諸業、十界・百界・千如・三千世間を出でず」文。籤の二に云はく「仮は即ち衆生、実は即ち五陰及以国土、即ち三世間なり。千の法は皆三なり。故に三千有り」文。弘の五に云はく「一念の心に於て十界に約せざれば事を収むること遍からず。三諦に約せざれば理を撰すること周からず。十如を語らざれば因果備はらず。三世間無くんば依正尽きず」文。記の一に云はく「若し三千に非ざれば撰すること則ち遍からず。若し円の心に非ざれば三千を撰せず」文。玄の二に云はく「但衆生法は太だ広く、仏法は太だ高し。初学に於て難しと為し、心は則ち易しと為す」文。弘の五に云はく「初めに華嚴を引くは、心は工みなる画師の種々の五陰を造るが如し、一切世界の中に法として造らざること無し。心の如く仏も亦爾なり。仏の如く衆生も然なり。心・仏及び衆生是の三差別無し。若し人三世一切の仏を求め知らんと欲せば、当に是くの如く観ずべし、心は諸の如来を造ると」金鐔論に云はく「実相は必ず諸法、諸法は必ず十如、十如は必ず十界、十界は必ず身土なり」文。

三身の事

先づ法身とは、大師、大経を引いて「一切の世諦は若し如来に於ては即ち是第一義諦なり。衆生顛倒して仏法に非ずと謂へり」と釈せり。然れば則ち自他・依正・魔界仏界・染浄、因果は異なれども、悉く皆諸仏の法身に乖く事非ざれば、善星比丘が不信なりしも、楞伽王の信心に同じく、般若蜜外道が意の邪見なりしも、須達長者が正見に異ならず。即ち知んぬ、此の法身の本は衆生の当体なり。十方諸仏の行願は実に法身を証するなり。次に報身とは、大師の云はく「法如々の智、如々真実の道に乗じて、来たって妙覚を成ず。智は如の理に称ふ、理に従って如と名づけ、智に従って来と名づく。即ち報身如来なり。盧舎那と名づけ、此には浄満と翻ず」と釈せり。此は如々法性の智・如々真実の道に乗じて妙覚究竟の理智法界と冥合したる時、理を如と名づく。智は来なり。